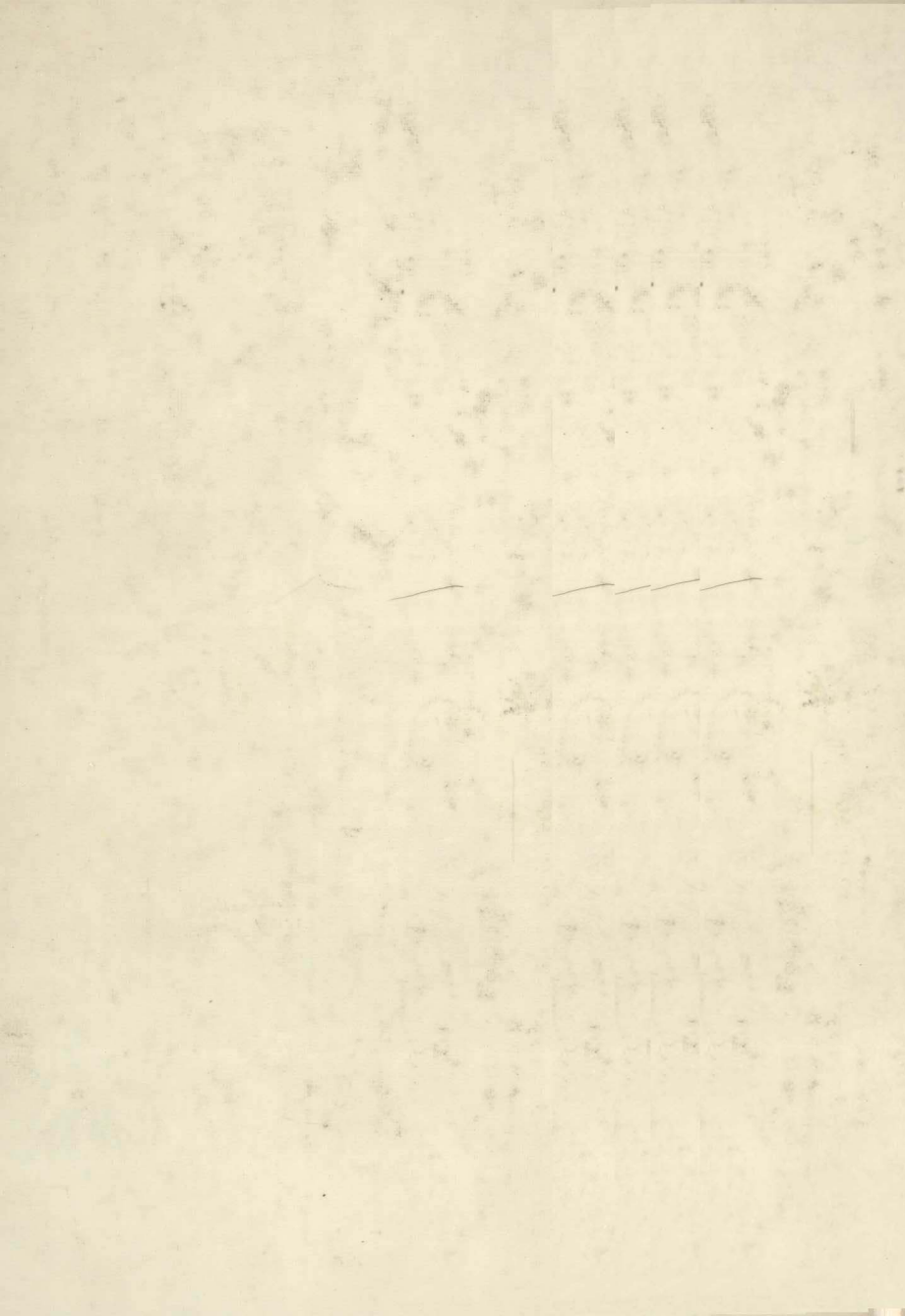




木下杢太郎日記

第一卷

木下奎太郎日記 第一卷

第一回配本(全五卷)

一九七九年十一月二十九日 発行

定価三〇〇〇円

著 者 太 田 正 雄

発行者 緑 川 亨

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二五五
株式会社 岩 波 書 店

電話 〇三二六五二二
振替 東京六三六三〇

印刷・三陽社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

日

記

一

明治三十四年—明治四十二年

白雲日記〔明治三十四年〕

七月十三日 晴天

午前植物の試験あり此日は試験終了の日なり、心飛立つばかり、

午后秋菊と神田松本の會に趣く、つまらなし、出席者十餘名、大半沒趣味漢なり、されば醜聲醜語漸く起る、何と改善とな、一致とな、糞を叩いて金を求むる、さりとて中々につらかり。此日感あり、人は必ず偏傾的なり、これ人に美あるところ醜あるところ、戦あるところ平和あるところ、されば酒を止めむと欲せば比較的に害き煙草に耽らしめよ、阿片に耽るものには酒を與へよ、徒に平靜を強い、過不及なからむ事を強ゆる一週一時の倫理講義、徒に厭倦と睡眠とを與へて、最も神聖なる可き倫理室の机上、漸く醜語の樂書板と化さむとす、噫、不知教育者先生夜半の夢如何、

七月十四日 晴天

別に何のこともなし、唯試験終りて心うか／＼とせるのみ、

七月十五日 晴れたり

午后本郷を訪ふ、御馳走になりて歸れり、

七月十六日 晴

長田を訪ふ、既にあらず、夕暮車飛び馬走り、高襟行き紅袴歸る飯田町通り思は徒に長く燈光ひとり煌々、

夜雨降りしと思へたれど、

七月十七日 晴

歸京する日の朝なり車上旭日を家上に望む、品川海上青布遠く連り砲臺、船檣朝靄に模糊たり、國府津驛に下り伊豆通汽船を求め有らず、爲めに瀛車に乗り遅れ損ひし難あり、函根山下明又暗、去年、又一昨年一轉又一轉に吾の漸く國境に近きしを喜びし時もありしが今は故郷に歸るが樂くもあり又は歸るの日の餘に早き思ひもあり、今昔の感なきに非ず、

冷川峠の上りに脚氣の足の一步も進まざりし事あり、茶屋に二時午睡せし事あり、さはれ無事に家には歸れり、

こゝらの所去年若しくは一昨年ならむには心たのしさに堪へずしてそを書き記すべく種々の形容に日記うずまらむものを世に馴れたればか昔の清き思もなしあはれといはゞあはれ、されど世の人はそをさかしといふ也

七月十八日 晴なりしならむ

筆も握らず、 もとらず、さりとて下駄減らせしにもあらず、平和なりといへば平和、平凡といへば平凡。

七月十九日

七月廿日

七月廿一日

此間矢張、平和なるⅡ平凡なる日をくらせしならむ、今Ⅱ八月也そこを回顧するに氣憶の網に留るもの毫もなければ、

七月廿二日 たしかに晴なりと覺ゆ

沖繩丸來り投錨す、大島よりの海底電線を沒すべく其沿岸及び對岸を測量す可く派遣されたる船也、兄と大島まで乗せて貰ふ可く乞ひたれども先例なしとて許されず。既にして汽笛一聲黒煙天を流れ水平線漸く船跡をのんで餘波たゞ白く黒く。

七月廿三日 晴

初島の祭にゆく、朝下山の船に乗り込み、船岸をはなれて伊東漸く小ならむとするとき、鎌田よりの乗客、花合せを始む、一貫一錢也、吾等船頭を包むで其難船話を聞き將に肉をどり膽とぼんとするとき忽ち聲あり、「とうくあやめをやられたか」尋で銀貨の一音鏗然、衆大笑之れを見れば鼎坐の客顔色金時のそれよりも赤く或者は嬉色天を仰ぎ或者は默地にうつむく、

島に上陸し島田九兵衛氏の周施(マツ)により寺を借りて居れり、島九氏醉顔、笑語縷々として出で衆始め笑ふて遂に倦む

島の鹿島も見ぬ、島の屋々も見ぬ、いざこれより島經廻らむとて稻葉某氏、某姓四郎氏とも先づ磯つてにゆく、岩石日光にやけて熱きこと甚だしく、ほうらくの刑場とは蓋し過言なり、

島の沙丘上、凹凸なく一面茫、時に島たるを忘れしむるあり、水仙花なけれども其葉は長きこと殆んど二尺以上、桃は切り倒されて今なきは憾みなり。

夕日暑きころ再び歸れり、

附記戸數四十餘道端せまく石道也、各家軒下に風呂あり妙齡の女先づ浴すと見えたり、往來人繁きところ圓々たる白朮を公然示すはあまりよき風にはあらず、さばれ質朴なる小桃源はこれを以て知り得べきか、否か、

祭禮中は一日の内に晴衣數度きかふるとか、

七月廿四日

〔月日不明〕

今日秋風立ちぬ、海に波高く荒れぬ、嗚呼寂として無限より起り寞として無限につらなるもの時にあらずや、思へば眇たる哉人や、有限有終僅か百年の齡を以てタイムの砂上に或は單調に或は複雑に種々の形を画いて而も得々たり、されど思へ百年の齡よし天より之を見れば或は短らむ、之を人より見れば如何、

たとへ盧生が一炊といふも、よし夢幻の如しといふも、時に嬉々たり、哀々たり、或は灼然として盛え或時は^{〔空白〕}として衰ふ人誰か人生を稱して短しといふや

暑中休暇はや逝かむとす、素より之れ悲哀事にあらず、されどひとり月明なるの時願つて過去を思へ、否休暇の始まりたる其時を思へ、僅か六旬、さはれ何となく、まことたゞ何となく悲しきがごとく樂しきが如く、遠きが如く、近きが如きにあらずや

嗚呼六旬の暑中休暇に於ても此感あり、暑中休暇も人生が一時なり、今儼として襟を正して

〔以下缺〕

滿松山六日之記〔明治三十五年〕

七月六日

明治三十五年七月六日午前六時新橋停車場に集る者飯島、松本、太田、福島、森の五人、小此木は其祖父の喪に會し石津は偶腦に病を得て、不幸にして旅行を共にする能はず。」

六時二十分發神戸行の急行列車は我等を乗せて徐ろに歩を進めつ、車内山野を眺むる者、本を取り出す者、後には新聞を購ひて讀む者其顔忽ち相合し或は忽ち離れて紅色白色の新聞中に或は窓の外に隠見して常に變々たる和氣に滿つ、觀^み未^みだ大に至ると稱す可からずといへども夫れ歡の未だ到らざるは其到る時や甚だ大なる可き爲めに非ずや、此間品川、平沼、大船、大磯を経て既に國府津に着す、飯島と福島とは町に脚^{あし}胖^はを求め他或は脚^{あし}胖^はを穿ち或は荷物を汽車に托して沿津に運輸せしむ。」

用終り儲電車にて湯本に趣かんとするに既に電車去つて影だに無し之れ我等發車時間の切迫する斯くの如きを知らざりし過也次の發車には尙中々待たざる可からざれば乃ち次發電車の後より我等に追ひ及ぶ者に飛び乗らんと決して胖^はを堅くし徒歩す、國府津の濱には細松多し、暫く松下沙上^{すな}に初休して煎餅を噛みつゝ海上を眺む、此煎餅や福島^{ふくしま}の持參する所、天甚だ快ならずと雖も、薄き黝雲

層の間赤橙色に輝きて雲上遙かなる太陽の微笑を漏せり。單調なる長き街道、酒匂川の濱に至りて稍可也嘗つて秋季遠足會の際此沿岸の景の石津の郷に似たりと説く者ありしを想ひ浮べて我等二人の在らざるを悲しみぬ。」

河や砂洲廣く、水多からずと雖も其海に進む所茫として天に接するが如く白帆點々翠黛の間に隱見するを遠望しつゝ長橋を渡る長さ殆んど二百間に近し、橋を渡り盡せば二路に分岐す一は街道にして他は電車道、我等は左電車の路を取りてゆく、此橋、橋錢を徵集す而かし其番所は街道に沿ひて車道よりは遠し而して番人吾等が玆を行くを知らざる者の如し、どこ迄番人氣が付かざらんかと、しらぬ振して急ぐ、忽ち風あり、田圃を過ぎて鼓膜に聲を傳ふ、蚊の鳴くが如し曰く、「オーイ、オーイ！」

乃ち是也、言はなくても知つていらアと偕飯島會計課長を煩はす。

大藏大臣飯島老伯之に趣いて數秒忽ち颯々と大風の至るが如き者有り、是れ電車！ 驅足！ 驅足、我等辛うじて之に乗り得しと雖も飯島未だ來らず、出車の鈴鏘々而して、飯島未だ來らず咄嗟！

電車は音を立てゝ進めり、嗟呼分！ 秒！ 飯島來らず、未だ來らず。

爆然音を立てゝ人既に車に在り、嗚呼飯島!!! 『よかつた！』

風呂敷の口は開いて辨當の包將に落ちんとす、」

小田原に暫く休車して又出發を始めつ、乃ち森の嘗つて求むる所の葉書二枚を出す、南無三太田筆者の任に當つて當惑の息青し、書かんと欲して膝に載すれば膝ゆすれ車牀に當つれば紙動く、唯單

簡に出立を報じ各自筆を以て署名す其字隱士の臂枕して横臥するが如く、或は墓公の挨拶振の如く、偏西に傾き下より天をのぞく如き者、鼎、飯等蓋し白眉と稱す可き也」

午前十時半湯本に下車す、忽ち見る歐人の悍馬を制する顔赤きを、それも後ろになる頃には、路の勾配やゝ高し、途側の家屋皆小玩具を製せり。」

箱根の山路、左右大樹小樹亭々として深く茂り圓石疊々相並ぶを特色となすが如し、殊に老杉の矗然天を摩する者最も佳となす」

これより先電車の小田原を發せんとするに當つて一漢有り、網笠を被り吳蘆を負ふ、注意を拂ふの價值あるに非ざれども何となく忌なる奴也き」

畑に向つて進みある途中右を眺むれば赤蛇を山を下るが如き者有、是發電所の原動力たる可き瀧に非ず乎、嗚呼之れ人間が自然と抗せんとする標本に非ず乎嗚呼鬱蒼たる深山を望み、藍深き天を仰いで而して此を觀る、自然大、人事煩、大を取つて煩を避けんか、生活の義務を奈何せん吾人が心中常に此争なくんば非ず

勇壯なる元氣を以て山を越え畑に達す、時正に十二時、飯を齧ぐ家に入りて辨當を食ふ、森が持ち來りし白毛布の重さは、容易に彼の容貌が證し得べき事也」

其後、先となり、後となりし彼の吳蘆漢は矢張こゝにて飯を食ひて在りき、相別れ其會する三度、附記す此後に彼に就いての物語なし、

裏の小瀧に口を洗ひ辨當を開く、但し之を持たざる者森、福島。飯島は飯腐りたる恐有とて犬に吳

れたり、

箱根深山と稱す、而かも既に俗化せり、余豈一小失敗の故を以て好んで侮る者ならんや、香々でも一寸食ふに堪ふる者を求めしに陣立嚴かに腐鳥賊五碗を出す、之を以てか出立に際し茶代少許、然かも出す所は菓既に空となりて公然碗底を表はす呵々」

畑よりの上りは前途に比して較嶮也、滑石足を曳き歩行難甚だし、試験に掃き集めたる頭は重く足は輕し、是れ鏡面に達磨を倒立せしめたる類踏薄氷望深淵の比に非ず、於茲乎說者有り、夜遅く沼津に着いてもいゝからゆつくり行かう(！)」

山險を加へぬ、氣濕を増しぬ、草木蓬々道乃ち屈す、見よ綠山兀然雲を壓するを、秋日尾花枯れて風淒涼たる趣はなくとも綠盛んに彌々盛に莊且大。翻つて後を視れば關東八州渺茫天に接す、譬へ早雲の勇なしと雖も誰か大氣汪勃たらざる人や有る」

葦之湖に達しぬ、渴に堪たる咽喉には水有り、權現の社道湧水澄水晶」

芦之湖は太平にて小漣なし、其山其森の單調と見ゆるは欲か然れども神社は佳也日光影をなして綠苔に薄き群青を亂さしむ、景の淡なるが如く人事も遠し殿園に紅薔薇滿開中」

茶屋に菓を食ひ離宮を後にし舊關所も難なく越えて山を上る、~~~~三時山中に達す、茲に些の物語有

山中の少し前、山のステツペンの所に木標有靜岡縣と神奈川縣との堺を示す、其地一面綠渺々快限りなし、念ふに我等既に一府二縣を踏破せり、茲を下る數町大きな茶屋あり、入り休む、

田舎漢齡四十を超ゆる者あり、昔の名残頭に黒き一の字、其調に伊豆的臭味を缺く、是れ既に太田の氣付く所、諸去らんと欲して茶代五錢を置けば、辭して曰く

『決していらん!』

我等故を知らず、唯其尊大の風と謝金によりて之を怪しみ指示に従ひ見れば柱に「御休憩せつたい茶屋」との札掛れり

言の調や茨城に近かくして而して然らずといふ、憶ふに流浪久しき幕臣の一乎之れより雜談茶屋の謂れを知り得たり、

嘗つて舊幕未だ盛大なりし頃上下の馬常に茲に休むを常とし江戸行の馬には豆を與へし所也箱根が天下の大街道たりし時に當つてや此處は施行臺として交通の要路たりしが星移る幾年明治維新より以來日に益衰へ昔の面影見る可くもあらず家根はかたぶき柱は朽ちて遂に趾だに無し焉さる程に下總國香取郡長部村の住人に遠藤良左エ門亮規といふ者有之を惜しみ其門人等三人相謀つて今の家屋を立てし也とこれも言へり、其門人等の二名は嘗つて静岡の縣會議員たりしが既に死して殘者已一人耳と

色々聞き質しければ男奥に入りて寫本一冊を持ちて來りぬ抑も彼遠藤亮規といふは性理學の教導職にして此性理學といふは天保三年頃よりの設立にして専ら通俗哲學倫理學的の講習會なるが如し其書の表題を「性理學由來書」と稱す、

家はと見るに普通農家の體にして高き釜土を据えたり、前には道を距てゝ小園有り寒地なりとて躑

躑花盛んに咲き亂れ葉櫻の葉なほ南天程の大きさに過ぎず、中央に矢來を結び木碑を立つ書に曰く「東宮殿下御休憩之所」と

嘗つて東宮殿下が茲に休まれたりし時も茶代を受くるを同せず遂に下總に問ひ合せて始めて受取るに至りしと」

四時二十分山上の崖邊に据して遠く限りなき谷地を望む、——笹原を經三ッ谷を過ぐれば三島まで半道也それより、市山、塚原を經て三島に着時五時三十餘分

三島の町神社の前殊に賑か也縞衣白帶の郷青年揚々として街を縫ふ、これ關東關西の混血兒にして而かも山險に部落各孤立せる東、西、奥豆の中間兒、茲に於て乎圭角を磨して輕薄也、吾人愛豆の男憤激に堪へざる者、」

馬車にて沼津に向ふ、馬車や田舎の我落多なりと雖も道は坦なり、これでも都の公達は尻いたしなごいふめり、難有泰平の御代にこそと例の口ひげみてほゝえむ、

鳥去て晚雲徘徊し町人稍忙はし氣なる頃沼津にて下車す、駄賃一人に付き五錢。警察に衝き當りて右折し非禮の地までいたれども適當なる家無し、又退去し下車せし所の麥藁屋に入る、是れより麥蒿を打つなりと吞氣過ぐれど詮方なければ待つ、まゝよと惠比壽、黒きを傾くることゝして松本最も赤し、森は家に出す可き葉書を書けり、

盛三杯宛食ふ」

偕中山氏を訪ひぬ、在らず今日三島に自轉車競争有りて之に赴けりとして母堂ならんか慰懃に語る、